血症診療エキスパートへの手引き．東京：臨床医薬研究協会，2007.
3) 多田紀夫．HDL-コレステロールが低い，どうしよう？ 寺内康夫編著．現場の疑問に答える糖尿病診療Q&A．東京：中外医学社，2007. p. 170-3.
4) 多田紀夫．「CBT こあかり リ・コ」編集委員会編．CBT こあかり 5 リ・コ 2008 五肢択一形式篇．東京：医学評論社，2007.
5) 多田紀夫，吉田 博．食後高脂血症に対するエビデンス．五十嵐脩，池本真二，板倉弘重，井上浩一，菅野道廣監修．DAG の機能と栄養．東京：幸書房，2007. p. 158-73.

精 神 医 学 講 座

教 授：中山 和彦　精神薬理学，てんかん学
教 授：笠原 洋勇　老年精神医学，総合病院，精神医学，心身医学
教 授：伊藤 洋　精神生理学，睡眠学
教 授：中村 敬　精神病理学，森田療法
准教授：宮田 久嗣　精神薬理学，薬物依存
准教授：須江 洋成（兼任）　臨床脳波学，てんかん学
講 師：忽滑谷和孝　総合病院精神医学
講 師：山寺 亘　精神生理学，睡眠学
講 師：小曽根基裕　精神生理学，睡眠学
講 師：小野 和哉　精神病理学，児童精神医学
講 師：中西 達郎　総合病院精神医学
講 師：橋爪 敏彦　老年精神医学，総合病院
講 師：古賀聖名子　精神薬理学，精神医学

教育・研究概要

I. 精神病理・精神療法研究会

精神病理学および精神療法学の最新のテーマについて研究を行った。境界型パーソナリティー障害の治療方法の研究では，短期で適度に構造化された入院治療技法の研究を進めている。また，職場のメンタルヘルスの観点から，職場において精神疾患のために休職せざるをえない患者の背景因子を検討し，その問題点を明らかにする研究を開始した。さらに，M. Linehann の弁証法的行動療法の翻訳を行った。

II. 児童精神医学研究会

児童思春期における軽度の発達障害や行動障害の治療に関する研究を行っている。また，広汎性発達障害への治療的接近のあり方に関する研究や，児童青年期における自傷行為に関する研究を施行した。

III. 森田療法研究会

「社会不安障害に対する森田療法の有効性に関する研究」は終了し，その成果を報告した。また，日本森田療法学会の事業として「外来森田療法の標準化に関する検討」を進め，ガイドライン作成を準備中である。慢性抑うつ患者の性格学的研究，入院森田療法により改善した患者の主観的体験について質的研究，不安障害･気分障害の経過中に生じる「寝込み反応」についての精神病理学的研究，パニック障害と全般性不安障害の関係について性格学および共存障害の観点からの研究は，本年度も継続して行っ

た。これに加えて，本年度から強迫性障害のサブタイプに関する研究を開始した。

IV. 薬理生化学研究会

基礎研究では，1）脳内透析法およびラジオイムノアッセイ法による新規向精神薬の脳内作用機序に関する研究，2）薬物依存の形成，維持，再発における学習・記憶系脳内神経回路の役割に関する研究を行った。臨床研究では，1）やめにくさの観点から依存性薬物の摂取欲求を検討した研究，2）Positron computed tomography（PET）を用いた精神疾患の脳内受容体に関する研究，3）ウイルス学講座との共同研究で精神疾患における遺伝薬理学的研究，4）非定型抗精神病薬の合理的薬物療法に関する研究を行った。

薬理生化学研究会では，精神疾患の脳内神経学的機序解明を中心とした基礎研究と，臨床研究の統合を試み，疾患の機序解明にとどまらず，患者の日常生活機能の向上をめざした治療法の開発を目標としている。

V. 精神生理学研究会

ベンゾジアゼピン（BZ）受容体選択性の差異によるBZ系・非BZ系睡眠薬の副作用特性に関する研究，閉塞型睡眠時無呼吸症候群に対する経鼻的持続陽圧呼吸の治療効果に関する研究，精神生理性不眠症に対する外来森田療法および認知行動療法の治療効果に関する研究，Cyclic Alternating pattern（CAP）を指標とした抑肝酸やクエチアピンによる睡眠内容に与える影響，難治性不眠に対する臨床研究，ストレスと休養に関する研究，機能性胃腸症における睡眠障害に関する研究などを行った。

VI. 老年精神医学研究会

1998年より行っている新潟県糸魚川市での疫学調査を継続しており，現地での受給者台帳の調査を施行した。今後は介護保険の利用状況･費用調査，生命予後に関する調査を行う予定である。また，総合病院精神医学研究班および外科との共同研究として「癌患者における精神障害」を行い，乳癌患者を対象として精神障害の有無，精神症状の程度，背景因子との関連，身体疾患との関連等を調査する予定である。なお，本年度から，老年精神医学研究会を中心として本院において「認知症専門外来（仮称）」を開設する準備を行っている。

VII. 総合病院精神医学研究会

まず，うつ病再発予防教育では，ビデオ教材をスライド化し，より柔軟に患者のニーズに対応することを目指した。効果判定の心理検査では，認知・行動・感情の3側面と総合的なパーソナリティの測定に加え，うつ病の寛解期における睡眠状態を把握する目的で，新たに睡眠評価尺度も取り入れた。また，最近増加しているPersonalityの未成熟性や偏りが存在する症例にも対応しうるプログラムを検討している。次に，末期患者に対する終末期医療（緩和ケア）では，癌センター東病院との数年来の共同研究により，がん患者，その家族，および遺族の心理的課題に関する研究を行った。さらに，入院患者やスタッフから要請を受けて，臨床心理士を中心とした精神科スタッフがメンタルサポートを開始した。

VIII. 臨床脳波学研究会

古典的脳波の臨床的特徴についての再考を行っており，前年度に続き6 Hz棘徐波複合，いわゆるphantomについて検討を行い，近年導入された非定型抗精神病薬により誘発されたとされる脳波異常・発作では，6 Hz棘徐波複合がみられたことから非定型抗精神病薬のH1受容体への親和性が関係していることを示した。その他，精神生理研究班や脳外科との共同によって，診断が困難な症例の検討を行っている。

IX. 臨床心理学研究会

2007年度も心理療法の技法の向上を図るために，症例検討とディスカッションを継続して行った。また精神分析的精神療法，森田療法，カウンセリングの技法についても学習を深めた。さらに，心理テストについては，発達障害・人格障害を中心に研究をすすめた。慈恵心理臨床の集い（研究会）では，糸井岳史先生を講師として招聘し，発達障害のアセスメントについて症例を通して検討した。このような臨床・研究活動のみならず，心理研修生を積極的に受け入れ，心理学的教育に積極的に取り組んだ。

「点検・評価」

2007年度においても，9部門の研究会からなる研究活動を行い，基礎的研究（薬理生化学，精神生理など）から臨床研究（精神療法，リエゾン，臨床脳波，認知症の疫学研究，臨床心理など）まで幅広い方法論を持つことが当教室の特色である。このことは，脳科学から精神療法まで幅広い知識が必要とされる精神科治療を実践するに際して望ましい研究体

勢にあるといえる。本年度は，これに加えて，児童期から老年期まで幅広い疾患に対して，それぞれの研究会が専門外来の開設や，専門医によるリエゾン活動を活発に行うようになった。このことは，医学科における研究と臨床のあり方として望ましく，また，教育の観点からも良好な効果が期待される。研究活動においては，従来通り，それぞれの研究会が積極的に研究費を獲得して研究を行い，活発な学会発表がなされている。しかし，原著論文，特に，学術的に権威のある国際誌などへの投稿は多いとはいえず，今後，より厳密な研究計画に基づいた独創的な研究が求められる。さらに，各研究部門での独立した研究テーマにとどまらず，教室全体として大きな研究目標を設け，基礎と臨床のジョイントした研究を計画する必要を感じている。

研　究　業　績

I. 原著論文

1) Shinagawa S, Ikeda M, Toyota Y, Matsumoto T, Matsumoto N, Mori T, Ishikawa T, Fukuhara R, Komori K, Hokoishi K, Tanabe H. Frequency and clinical characteristics of early-onset dementia in consecutive patients in memory clinic. Dement Geriatr Cogn Disord 2007 ; 24(1) : 42-7.

2) Hayashida K, Inoue Y, Chiba S, Yagi T, Urashima M, Honda Y, Itoh H. Factors influencing subjective sleepiness in patients with obstructive sleep apnea syndrome. Psychiatry Clin Neurosci 2007 ; 61(5) : 558-63.

3) Matsumoto N, Ikeda M, Fukuhara R, Shinagawa S, Ishikawa T, Mori T, Toyota Y, Matsumoto T, Adachi H, Hirono N, Tanabe H. Caregiver burden associated with behavioral and psychological symptoms of dementia in elderly people in the local community. Dement Geriatr Cogn Disord 2007 ; 23(4) : 219-24.

4) Toyota Y, Ikeda M, Shinagawa S, Matsumoto T, Matsumoto N, Hokoishi K, Fukuhara R, Ishikawa T, Mori T, Adachi H, Komori K, Tanabe H. Comparison of behavioral and psychological symptoms in early-onset and late-onset Alzheimer's disease. Int J Geriatr 2007 ; 22(9) : 896-901.

5) Nagata T, Harada D, Aoki K, Kada H, Miyata H, Kasahara H, Nakayama K. Effectiveness of carbamazepine for benzodiazepine-resistant impulsive aggression in a patient with frontal infarctions. Psychiatry Clin Neurosci 2007 ; 61(6) : 695-7.

6) 中山和彦．女性の精神医学　非定型精神病と月経関連症候群．精神医 2007 ; 49(12) : 1216-8.

7) 中山和彦．ドイツ医学とイギリス医学の対立が生んだ森田療法．慈恵医大誌 2007 ; 122(6) : 279-94.

8) 中山和彦．【女性のライフサイクルとメンタルヘルス】月経周期と精神医学的問題．精神 2007 ; 10(5) : 400-8.

9) 中山和彦．【精神科臨床における性機能の問題】性ホルモンと脳機能　主に臨床的事項について．精神科治療 2007 ; 22(11) : 1285-94.

10) 中村　敬，久保田幹子．【社会不安障害/社交恐怖】社会不安障害に対する森田療法とその有効性．臨精医 2007 ; 36(12) : 1513-9.

11) 小曽根基裕，沖野慎治，中田浩二，中山和彦．Functional Dyspepsia における消化器機能異常と心理的側面の関連性についての研究．Ther Res 2008 ; 28(4) : 641-5.

12) 舘野　歩，矢野勝治，鹿島直之，樋之口潤一郎，塩路理恵子，久保田幹子，浦島充佳，中村　敬，中山和彦．強迫性障害の入院森田療法に併用された薬物療法の時代的変遷．日森田療会誌 2008 ; 18(2) : 83-92.

13) 品川俊一郎，中山和彦．認知症患者の早期受診・介入の障害となる要因に関する検討　一般市民・かかりつけ医・介護支援専門員のアンケート調査より．老年精医誌 2007 ; 18(11) : 1224-33.

14) 品川俊一郎，池田　学，豊田泰孝，松本光央，松本直美，足立浩祥，森　崇明，石川智久，福原竜治，鉾石和彦，田辺敬貴．地域在住高齢者における主観的もの忘れの背景因子の検討．老年精医誌 2007 ; 18(3) : 313-9.

15) 落合結介，児玉　健，中山和彦．Aripiprazole により良好な治療的介入が可能となった統合失調症の1例．最新精神医 2007 ; 12(4) : 363-7.

16) 岩崎　弘，須江洋成，宮本千佳子，中山和彦．健忘を主訴に来院し，背景にてんかんの高齢発症をみた例．社精医研紀 2007 ; 36(1) : 21-4.

II. 総　　説

1) 中山和彦．中高年のうつ病について知っておきたいこと．暮らしと健康 2007 ; 5 : 16-9.

2) 中山和彦．【数字で知るこころの問題　何人いるの？どのくらい治るの？】メンタルヘルスに関係する問題　増加する更年期障害の意味すること．こころの科学 2008 ; 139 : 47-51.

3) 中山和彦．【PMS・PMDD と鍼灸治療】PMS および PMDD のメカニズム　その診断・鑑別・治療について．医道の日 2007 ; 66(7) : 24-30.

4) 中山和彦．【受診しないうつ】うつ病と死．こころのりん a・la・carte 2007 ; 26(1) : 93-6.

5) 中村　敬．【更年期女性に対する心理療法】更年期

障害への森田療法．日更年医会誌 2007；15(1)：146-50.

6) 中村 敬，舘野 歩．【強迫の診立てと治療】強迫性障害の森田療法 入院および外来治療の実際．精神科治療 2007；22(6)：685-91.

7) 中村 敬，川上正憲．【揺れ動く強迫性障害のゆくえ】強迫性障害 精神病理学の立場から．精神 2007；11(2)：133-9.

8) 宮田久嗣．精神科外来における最新の薬物療法への期待と課題．外来精神医療 2007；7(1)：45-51.

9) 忽滑谷和孝，中山和彦．【コンサルテーション・リエゾン精神医療の実践】チーム医療によるコンサルテーション・リエゾン精神医療 臨床心理士の役割．臨精医 2007；36(7)：721-4.

10) 落合結介，笠原洋勇．【非定型抗精神病薬と老年期精神疾患】高齢者の気分障害と非定型抗精神病薬．老年精医誌 2007；18(7)：723-8.

11) 落合結介，笠原洋勇．【アルツハイマー病 基礎研究から予防・治療の新しいパラダイム】 基礎編 アルツハイマー病の病理・病態 危険因子としての非遺伝的要因 うつ病．日臨 2008；66(増刊1 アルツハイマー病)：190-3.

III. 学会発表

1) 中山和彦．(特別講演)うつ病の薬物療法・再考．第55回栃木県精神医学会．宇都宮，11月．

2) 中山和彦．(シンポジウムI：森田療法の原点)森田療法の源流を，その成立過程から探る―森田療法の成立に先立つ「祈祷性精神病」研究の意義．第25回日本森田療法学会．東京，10月．

3) Nakamura K, Imamura Y. Morita Therapy: Its development and current situation of practice. JSTP+WPATPS+WACP Joint Meeting in Kamakura (Japanese Society of Transcultural Psychiatry, World Psychiatric Association Transcultural Psychiatry Section, World Association of Cultural Psychiatry Joint Meeting in Kamakura). Hayama, Apr.

4) Nakamura K. Current situation and the future of Morita Therapy in Japan. The 6th International Congress of Morita Therapy. Vancouver, Aug.

5) Nakamura K. Cognitive behavioral therapy, mindfulness, and Morita Therapy. The 6th International Congress of Morita Therapy. Vancouver, Aug.

6) 中村 敬．精神療法における東洋的知―森田療法とマインドフルネス．第15回多文化間精神医学会．西東京，3月．

7) Miyata H, Hironaka N (JST ERATO), Takada K (Teikyo Univ), Miyasato K (Fuchunomori Cli), Nakamura K (Int Univ Health Welfare), Yanagita T. Psychosocial withdrawal characterictice of nicotine compared with alcohol and caffeine. 1st Annual International Drug Abuse Research Society and International Society for Neurochemistry Satellite Meeting. Merida, Aug. [Ann N Y Acad Sci 2008；1139：458-65]

8) 宮田久嗣，廣中直行 (JST ERATO)，高田孝二 (帝京大)，宮里勝政 (府中の森クリニック)，中村鉱一 (国際医療福祉大)，柳田知司．ニコチンと各種嗜好品の摂取欲求に関する臨床的研究：「やめにくさ」の観点からの検討．第42回日本アルコール・薬物医学会，第19回日本アルコール精神医学会，第10回ニコチン・薬物依存研究フォーラム平成19年度合同学術総会．大津，9月．

9) Itasaka M (Senshu Univ), Miyata H, Hironaka N (JST ERATO), Nakayama K. Nicotine-associated environmental stimuli increase brain reward function in rats. 69th Annual Scientific Meeting of College on Problems of Drug Dependence. Quebec, June.

10) 板坂典郎 (専修大)，廣中直行 (JST ERATO)，中山和彦，宮田久嗣．ニコチン探索行動における条件づけ機構の関与．第42回日本アルコール・薬物医学会，第19回日本アルコール精神医学会，第10回ニコチン・薬物依存研究フォーラム平成19年度合同学術総会．大津，9月．

11) 須江洋成，山寺 亘，岩崎 弘，佐藤 幹，小曽根基裕，大渕敬太，中山和彦．てんかんとされた睡眠時異常行動をみる診断苦慮の一例．第23回てんかんの精神症状と行動研究会．東京，4月．

12) Ozone M, Yagi T[1], Itoh H, Tamura Y (Asahikawa Medical College), Inoue Y (Yoyogi Sleep Clinic), Uchimura N (Kurume University), Sasaki M[1] ([1]Ohta General Hospital), Nakayama K, Terzano MG (Parma University), Shimizu T (Akita University). Microstructure of sleep in paradoxical insomnia. 21st Annual Meeting of the Associated Professional Sleep Societies. Minneapolis, June. [Sleep 2007；30(Abstract Supplement)：A253]

13) 小曽根基裕．睡眠奪取の生理機構と対応―時差症候群での睡眠奪取．第37回日本臨床神経生理学会・学術大会．宇都宮，11月．[臨神生 2007；35(5)：297-8]

14) 小曽根基裕，伊藤 洋，高橋敏治．ハワイおよびサンフランシスコへの渡航による精神作業能力に与える影響．日本睡眠学会第32回定期学術集会・第14回日本

時間生物学会学術大会合同大会．東京，11 月．［日本睡眠学会第 32 回定期学術集会・第 14 回日本時間生物学会学術大会合同大会抄録集］

15） 小曽根基裕，沖野慎治，中田浩二，中山和彦．Functional Dyspepsia の診断に関与する因子についての研究．第 6 回神経消化管研究会．大阪，11 月．

16） Shinagawa S, Toyota Y, Ishikawa T, Fukuhara R, Komori K, Hokoishi K, Tanimukai S, Ikeda M, Nakayama K. Cognitive function and psychiatric symptom in early onset frontotemporal dementia and late onset frontotemporal dementia. 13th Congress of International Psychogeriatric Association. Osaka, Oct.

17） 品川俊一郎，池田　学，豊田泰孝，松本光央，松本直美，足立浩祥，森　崇明，石川智久，福原竜治，鉾石和彦，田辺敬貴，中山和彦．地域在住高齢者における主観的もの忘れの背景因子の検討．第 103 回日本精神神経学会総会．高知，5 月．

18） 品川俊一郎，池田　学，繁信和恵，福原竜治，Nestor PJ，Hodges JR，田邉敬貴，中山和彦．前頭側頭葉変性症患者における食行動異常の特徴―日英の比較検討．第 14 回多文化間精神医学会．東京，2 月．

19） 岩崎　弘，関根　威，須江洋成，高橋千佳子，井上聖啓，中山和彦．非定型抗精神病薬によるとみられる脳波異常・発作発現例についての一考察～ヒスタミン H1 受容体との関連から～．第 10 回日本薬物脳波学会学術集会．東京，7 月．

20） 岩崎　弘，関根　威，須江洋成，宮本千佳子，森田昌代，井上聖啓，中山和彦．向精神薬による誘発とみられる脳波異常・発作発現例について―H1 受容体拮抗との関連からの一考察―．第 41 回日本てんかん学会．福岡，11 月．

IV．著　　書

1） 中村　敬．不安障害：精神療法の視点から．東京：星和書店，2007.

2） 中村　敬．森田療法とはどのような治療法か．慈恵医大森田療法センター編．新時代の森田療法：入院療法最新ガイド．東京：白揚社，2007. p. 19-57.

3） 中村　敬．森田療法．加藤進昌，神庭重信編．TEXT 精神医学．改訂 3 版．東京：南山堂，2007. p. 284.

4） 品川俊一郎，繁田雅弘．第 II 章 精神科診断学の基礎知識（1 精神科診断の進め方，2 理化学的検査，3 心理検査，4 神経心理学的検査）．上島国利，上別府圭子，平島奈津子編．知っておきたい精神医学の基礎知識：サイコロジストとコ･メディカルのために．東京：誠信書房，2007. p. 52-78.

V．そ の 他

1） 品川俊一郎，小野和哉，中山和彦．私のカルテから Risperidone と Fluvoxamine の併用によって著明な発動性の改善を認めた統合失調型パーソナリティ障害の 1 例．精神医 2007；49(7)：767-70.

2） 中村　敬．社会不安障害に対する森田療法の効果研究（総合）研究報告書．厚生労働科学研究費補助金　こころの健康科学研究事業　精神療法の実施方法と有効性に関する研究　平成 16～18 年度総合研究報告書 2007；131-1.

3） 宮田久嗣，昼間洋平，板坂典郎（専修大学院）．ニコチン依存の形成と維持における環境刺激の関与についての研究―学習・記憶の脳内機構の観点から―．平成 18 年度喫煙科学研究財団研究年報．東京：財団法人喫煙科学研究財団，2007. p. 610-5.

4） 宮田久嗣，古賀聖名子．薬物依存の形成・維持・再発の脳内神経学的機序と新規治療の開発に関する研究．平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究実績報告書 2008；1-27.

5） 宮田久嗣，板坂典郎（専修大学院）．ニコチンおよび各種薬物依存の形成，維持にかかわる脳内神経学的機序に関する研究―学習･記憶の観点から―．日本たばこ産業株式会社委託研究報告書 2008；1：1-7.